

平成25年度
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI
(研究成果の社会還元・普及事業)
実施報告書

HT25179 みえない世界に Let's try !～視覚障がい者といっしょに空間探索～



開催日：平成25年8月4日(日)
実施機関：関西大学 千里山キャンパス
(実施場所) (第4学舎)
実施代表者：亀谷義浩
(所属・職名) (環境都市工学部・准教授)
受講生：高校生7名
関連URL：

【実施内容】

■プログラムを留意・工夫した点

視覚障がい者体験や空間把握体験など、様々な場面で、視覚障がい者と参加者が交流や行動ができるように計画した。また、空間把握体験では、空間探索をするだけでなく、日常生活の動作も取り入れ、ゲーム感覚で楽しめ、参加者どうしが競争できるよう工夫した。参加者に体験が印象づくようにスケジュール進行を計画した。

■当日のスケジュールおよび実施の様子

【開講式(13:00～13:30)】

ひらめき☆ときめきサイエンス、科学研究費、および本プログラムの趣旨の説明をした。スタッフの紹介および、当日のスケジュールの説明をした。



開会式です。

グループに分かれて自己紹介。

【視覚障がい者体験(13:30～14:45)】

①直線歩行

大学キャンパスの屋外において、参加者はアイマスクを付け、白杖を持ち、30mの直線を歩く。歩行時間や歩行のずれを計測した。



アイマスクをして30m直線歩行。

②目的地探索

大学校舎内において、参加者はアイマスクを付け、白杖を持ち、階段を1階分上り、廊下を歩いて目的の教室まで探索する。歩行時間を計測し、目的地にたどり着いたかどうかを判定する。



階段を上ります。

廊下を歩いて目的地を探します。

【視覚障がい者探索歩行観察(14:45~15:15)】

参加者が視覚障がい者体験をした内容を視覚障がい者が行い、それを参加者は観察する。



視覚障がい者の階段昇降。

視覚障がい者の探索行動。

【休憩(15:15~15:30)】

移動および休憩。移動は参加者が視覚障がい者を手引きする。休憩は参加者および視覚障がい者がグループになって交流できるようにした。



高校生が視覚障がい者を手引きします。

【視覚障がい者と空間探索ゲーム(15:30~17:00)】

大会議室内にダンボールパネルで空間を作り、その中を探索することで空間形状を把握する。参加者は、アイマスクをし、白杖を持って、視覚障がい者と一緒に行動し、空間把握をする。また、空間内には、日常生活において欠かせないものを置いておき、それが何であるかを当てる。参加者は、視覚障がい者からヒントをもらってそれらを理解していく。



アイマスクをして視覚障害者と一緒に空間把握です。



把握した空間を描いてみます。

お金を数えます。

靴を並べます。

シャンプーとリンスを見分けます。

【視覚障がい者と交流(17:00~18:00)】

①ティータイム

視覚障がい者と参加者が交互に座り、交流できるようにした。飲物やお菓子を用意し、気楽に会話できるようにした。

②日常生活紹介

視覚障がい者の人たちから日常自分たちが困っていることや気を付けていること、さらには失敗談などが紹介された。また、視覚障がい者の人が使っている点字ライターやしゃべるノートパソコン、携帯電話、針をふれることのできる腕時計などが紹介された。

③質疑応答

参加者からの質問に対して、視覚障がい者が答えた。



ティータイムです。

視覚障がい者の話を聞きます。

視覚障がい者の人がいろいろな機器を持っています。

【修了式】

①アンケート記入

ひらめき☆ときめきサイエンスのアンケートおよび本プログラム独自のアンケートについても回答しても

②表彰・副賞授与

空間探索ゲーム優秀者に対して、表彰および賞品を授与した。

③未来博士号授与

修了証を一人ずつ手渡した。

【解散(18:30)】

解散後、参加した高校生たちと一っしょに後片付けをした。

■事務局との協力体制

事務局には、委託費の管理や関係部署との連絡調整を依頼した。また、当日の管理・調整を依頼した。

■広報活動

大学事務及びプログラム主催者からポスターやビラを高校に配布するとともに、高校に出向き参加依頼をした。

■安全配慮

参加者および協力者すべて傷害保険に加入した。

空間の作成においては、衝突や接触の恐れがあるため、ダンボールパネルとし、衝撃を吸収する素材とした。プログラム実施場所について障害物の除去および防御をした。

移動やプログラム実施中は、参加者1人に対してスタッフが3人程度でガードするように心がけた。

猛暑が予想されていたので熱中症対策として、十分な飲み物の確保や屋外行動に注意した。

■今後の発展性・課題

今年は、欠席者もあり、参加者が7人と少なかった。そのため高校生2人と視覚障がい者1人からなるグループを4グループにして実施した。この結果、グループ内の人数が少ないこともありスムーズに進行し、待ち時間も少なくなったが、参加者どうしの交流といった面では消極的となった。参加者人数に対応したプログラム作りが課題となる。また、今回とは異なった形状の模擬空間を作製し、様々な体験ができるようにプログラムを提供していくことが望まれる。

【実施分担者】

【実施協力者】 24名

【事務担当者】 政木 加壽沙 研究支援グループ